

論文題目 『明恵の研究』

氏名 平野 多恵(ひらの たえ)

本論文は、中世の文化を考察する上で見逃せない個性を体現している、鎌倉時代前期に華嚴宗の僧として高山寺を拠点に活動した明恵を対象として多面的に考察したものである。本論は三部に分かれ、四点の附録と四点の図版を付す。

第一部「伝記・法語・説話」は、明恵の没後に成立した伝記、説話などの流布と生成を探る。第一章「『明恵上人伝記』の系統と成立」は、従来伝本が未整理で基礎的研究も不十分であった『明恵上人伝記』(以下『伝記』と略す)諸伝本の調査・検討であり、伝本間で錯綜する所収説話の収録順序や有無のあり方の考察から、慶応大学蔵貞治本・高山寺蔵秀智本が、未整備の段階の伝本であり古態を保っていることを見出し、『伝記』本文が二系統に分かれることを明らかにする。また、仁和寺蔵本・高山寺残缺本が近世に流布した版本の草稿に関わる写本であることを指摘し、『伝記』の成長過程に見通しを得ることで、『伝記』収録説話の真偽とその伝播のありようを具体的に探ることを可能にした。第二章「『明恵上人遺訓』の成立」では、初期の段階で『伝記』下巻に組み込まれていた明恵の語録が、「上人御詞抄」として一つのまとまりとされ、徐々に整えられて条文も増補され、最終的に『明恵上人遺訓』(以下『遺訓』と略す)として版本化された過程を明らかにした。これらにより、『遺訓』に収められた明恵語録が明恵のものか否かを見定める基礎が作られたと言える。第三章「『沙石集』における明恵関連説話」では、「阿留辺幾夜宇和」の成立とその成長過程を明らかにし、明恵関連説話の流通経路を明らかにし、『沙石集』編集の問題にも一石を投じている。

第二部「和歌」第一章「『伝記』における西行歌話の再検討」では、第一部の成果を援用して、従来、西行の歌観を示すものとして論じられてきた、『伝記』中の西行歌話の一部が後代の増補であることを明らかにし、この歌話の核心が鎌倉後期から南北朝にかけてのころの和歌観の反映であるとする。第二章・第三章では明恵の和歌が仁和寺の文化圏や西行の影響を受けていることを立証する。第四章・第五章では、明恵における和歌の意義を考察し、第六章では第一部を総括して、伝統的な和歌の規範に則った初学の若年期、「遣心」としての和歌を志向した壮年期、菩薩としての姿勢から詠歌した晩年期と、年代により推移したことを明らかにする。

第三部「明恵とその弟子をめぐって」は第一章で『明恵上人歌集』を編んだ弟子高信を、第二章では尼僧たちと明恵との関わりを中心に考察する。

本論文の扱う範囲は多岐に亘るが、『伝記』や『遺訓』の伝本系統や成長過程の解明は今後の研究の重要な立脚点を作った点に大きな意義があり、明恵の和歌に関しても多くの新見を提示した。付録として付された『明恵上人歌集』の注釈も、難解な歌集の詳密な読解として極めて意義深いものである。『夢記』の問題や、思想の一層の究明など、今後に期待する部分もあるが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)に十分値するとの結論に至った。